

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	語源細見 : つくし・うどん・ゆきのした
Author(s)	十河, 直樹
Citation	ニダバ , 23 : 132 - 137
Issue Date	1994-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047980
Right	
Relation	



語源細見

— つくし・うどん・ゆきのした —

十 河 直 樹

0. はじめに

生活していて、便利がよいから買い求め、身近に置いたりする。物はそれが出来る。それでその物も生きる。言語は、学び、聞き、地域、家族、自分自身へと学び知り使う。それを地域なり、自分なりの言語として使うから、いつしか、時間（時代）の経つことによつて、元の形態とはかけ離れた形態の言語を使ってくる。それは言語の進化と言えようか。人によっては、言語の変化と言うかもしれない。

ただ、変化した言語を、人の口から、あるいは自分が口にしたとき、その言葉の元の形態、あるいは語源はどんな発想から形成されたのであろうと考える。そこで「語源は」と、急にその源を確かめたくなる。標題三語（つくし、うどん、ゆきのした）は、以前から自分なりの追及をしていた用語であった。ここにその機会ができたので発表してみたい。

1. 既成語源説

信頼に足る参考文献は、記下の三点とした。

- ①『大言海』 大槻文彦 著 ②『日本国語大辞典』 全二十巻
③『岩波古語辞典 補訂版』 大野晋他2名

1) ツクシ

①つくし（名）つくづくし【土筆】ノ略。其條ヲ見ヨ。

つくづくし（名）【土筆】【突くヲ重ス。突出ノ意。其形筆ノ頭ニ似ル故ニ、土筆ト書ス】杉葉ノ花。其條ヲ見ヨ。ツクシ。筆頭菜。字類抄「土筆、ツクツクシ」易林節用集（慶長）。草木門「天花菜、ツクズクシ」。源、四十七。早蕨二「蕨。つくづくしヲカキシ籠ニ入レテ」。

②つくし【土筆・筆頭菜】（名）中略。【語源説】ミヲツクシ（澤標）のツクシからで、突き立った柱の意。【野草雑記＝柳田国男】。

③つくしの項目不掲載。

つくづくし【土筆】ツクシの異称。「わらび一、をかき籠（こ）に入れて」＜源氏・早蕨＞。「土筆、ツクヅクシ」＜文明本節用集＞

2) うどん

- ①うどん (名) [饅饨] うんどんノ約。宗五大雙紙「温饨モ點心ニテ候ヘドモ、殿上ニテモ私ニテモ、急度シタル一獻ニ見及バス候」
- ②うどん [饅饨] (「うんどん (温饨)」の変化した語か) 中略。[語源説] 漢語ウンドン (饅饨) の約 [大言海・国語の中に於ける漢語の研究=山田孝雄]。温団が元であるとする説は非 [塩尻]。
- ③うどん [饅饨] 「うんどん」の転。「一にて酒あり」<言継卿記大・永七・五・二八>。「饅饨 (うんどん) を一と云ふが良しと言へり」<俳・かたこと四>

3) ユキノシタ

- ①ゆきのした (名) [雪下] (一) 虎耳科 (ユキノシタ) ノ多年草本ノ名。一根ニ数葉布生ス。葉、圓扁ニシテ蟹殻ノ如ク。邊ニ岐アリテ厚シ。面ニ緑紫ニ白紋、紫モアリ。背ハ毛ナク、淡紫色ナリ。夏、一尺許リノ茎ニ白瓣、長ク垂リ、三紅瓣、短ク上ニ竝ブ。根ヨリ細紅線ヲ出シ処々ニ小葉ヲ着ク。虎耳草。(二) (三) 略。
- ②ゆきのした [雪下] (名) ①ユキノシタ科の半常緑多年草。中略。[語源説] よく雪の下に在るところから雪之下の義 [名言通・日本語学=林甕臣]。
- ③不掲載。

2. 既成語源説の解析

1) ①「大言海」②「日本国語大辞典」③「岩波古語辞典 補訂版」の三種から、次の様な解析表ができる。

		ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	備	考
つくし	①	●	●	●	●	●	×	●	ツクヅクシを見よ	6
	②	●	●	●	×	●	●	●	[野草雑記=柳田国男]の説	6
	③	×	×	×	●	×	×	●	[源氏物語; 文明本節用集] 説	2
うどん	①	●	●	●	×	●	×	●	不明	5
	②	●	●	●	×	×	●	●	[大言海; 山田孝雄] 説	5
	③	●	●	●	×	×	×	●	不明	4
ゆきのした	①	●	●	●	×	×	×	●	不明	4
	②	●	●	●	×	×	●	●	[名言通・日本語学=林甕臣]	5
	③	×	×	×	×	×	×	×	不掲載	0
		7	7	7	2	3	3	8		37

ア 表記 (ひらがな)

イ 当て字 (用字=漢字表記) ウ 品詞

エ 項目移転 (AからBへ)

オ 語源独自説

カ 他者、他著引用、参考説

キ 他著、参考書、引用書名

2) 分析表から

A 既成辞書類の要約は

- 1) ツクシは、元「つくづくし」と言い、「土筆」と当て字表記。中国名「筆頭菜」と記す。名詞。語源説は①突くを重ねて、突出の意。②筆の頭に似ているので土筆と記す。③ミヲツクシ（濁標）の意からで、突き立った柱の意。の都合三説。
- 2) うどんは、元「うんどん（饅饨）」と称し、漢語「温饨」の約。
- 3) ユキノシタは、「虎耳科」を当て「ゆきのした」と音読。二辞書は、「雪下」と表記掲載。語源説は、①よく雪の下に在るから「雪之下」の義と。

B 専門分野の追究点

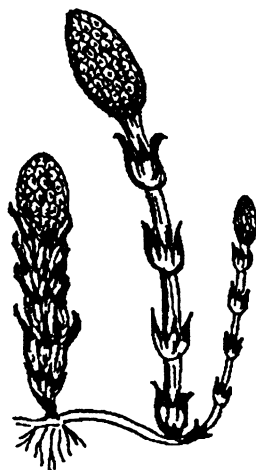
つくし、ゆきのしたは、植物である。当然なことながらその分野の専門家がいるはずである。つくし⇒「土筆」⇔中国名「筆頭菜」を検討したのであろうか。ゆきのしたの場合も似ていて、中国名「虎耳科」⇔日本名「雪下」と表記。

うどんは、「うんどん」が本当に元の呼名か。漢語「温饨」の約で「うどん（饅饨）」とは、疑問が募る。

3. 新語源説

◆ツクシ、ツクヅクシ

- 1) つくし（土筆）の方言は、日本全国では五百以上の呼称があろう。その理由の一つには、子女の間で特別な形態として観ることが出来るからであろう。ところで大槻文彦博士は“ツクシの古名はツクヅクシで、突くを重ねた言葉であり、突出している意である”としている。この解釈は、土筆が春さきに地上に突き出ているさまをいったものとみえる。ツクヅクシの接頭ツク＝は後で述べるとして、語幹にあたる＝ヅク＝は、何か別の意味がある様に思えてならない。語幹、語尾に＝ズク



、＝ヅクの付加した用語に、ズクシ、ミミヅク、シズク、コノハズクなどあるが、この四語の中ででも共通した要素を見つけることができる。ズクシは、ジュクシが元の語形であるが、熟した柿を指し、「まるまるとした形態をしている」。ミミズクは、木菟（みみずく）で言うまでもなく「首をすくめて着膨れした子供が懐に両手を入れた姿」に見える。シズクは、雨上りに底から一滴落ちる形は、まさしく熟柿の形と類似する。コノハズク（木菟）の形態もミミズクと同形。四語ともに＝ズクとなっている。さらに、江戸時代の初期の言葉に、ズクニュー（木菟入）というのがある。これ

はズクニュウドウ（木菟入道）の略されたものである。この入道も、ミミズク、シズク、ズクシ、コノハズクに似た形態をして、憎らしい坊主であると侮った言葉として使っていた。言うまでもなく、土筆の方言には、ズク系の用語がかなりあり、ツクボウ、ツクボ、ツクボウサン、ツクボンサン、ツクンボなどその一例である。こう考えてみると、ツクという要素には、「楕円形で、まるまるとして、頭頂がつるつるしている」という要素が自然に生れる。

- 2) もう一点、ツクツクシの接頭ツク=を、大槻博士は“突く”の意ではないかと解析している。土筆を摘んで遊ぶ子供らの唱に“どこどこ継いだ”と問いかけて遊ぶが、この“継ぐ”という意味に重要なポイントがある様に思える。つまり“突く”ではなく“継いで遊ぶ草”ではなかろうか。これを実証するような方言もかなりある。ツギグサ、ツギツギ、ツギツギグサ、ツギツギポーズ、ツギッポなど。
- 3) つまり、土筆の古名ツクツクシのツク=は“突く”ではなく“継ぐ”=ツク=は、“まるまると肥えた姿の坊主頭”=シは接尾語で、小さいものを表現した「子」。加えて日本語で「土筆」と表記するが、中国では「筆頭菜」（漢名）と表記す。これもスギナ（杉菜）：ツギナ（継ぎ菜）の要素と対立すると思うがどうでしょう。

◆うどん、ウンドン

- 1) 大槻博士は、漢語「温鈍」=ウンドンの約としている。うどんに似たものには、そば（蕎麦）、そうめん（索麵）、きしめん（碁子麵）、ひやむぎ（冷や麦）、あつむぎ（熱麦）などがある。素材、技法など違うけれども形態ではよく似ている。
- 2) ところで“うどん”の元は“ウンドン”であろうか。烏（からす）を「卯」と言い鶺鴒（うかい）に使う烏“う”を「鶺」と表記する。口に入れた物を一気に吞込むことを“うのみ”と言い「鶺呑み」と表記する。人が力を入れて何かに夢中になっている様子を指して“ウンジイットル”と備讃域で使う。子供同志の遊びで“にらめっこ”をする時の掛け声に“ワーローターラダメヨー ウントコドッコイショ”と使う。力を入れて物事をする時には“ウンと力を入れて”言う。このように「ウ」と「ウン」とは、本来、別の世界で用いられてた音形であるようにみえる。
- 3) まず、接頭の「ウ=」は、「ウソ」（嘘）、「ウニ」（雲丹）、「ウキ」（浮木）、「ウマ」（馬）、「ウシ」（牛）、「ウソ」（嘘）、「ウサ」（憂さ）、「ウコン」（鬱金）の様には有形の物を指示した名詞として使っている。それに対し「ウン」は、「ウンチク」（蘊蓄がある）、「ウンドウ」（運動する）、「ウンデイ」（雲泥の差）など、名詞ではあるが[動き][働き]により「差のある、またはその結果」を表現した「結果名詞」であると言えそうである。
- 4) 次に語尾の「=ドン」に焦点を当てて考察すると、「ドン」（呑）、「ドン」（井=「どんぶり」の略）、「ドン」（鈍）などで、「ドン=」が接頭にある場合は「ド

ンヅマリ」(物事の最後。はて。また足りているさま、またそのこと。行き詰まり)を意味している。これらの要素を検討すると「固まっている」「固まった」「固定している」といった共通要素を受け取れる。

- 5) そこで、「ウンドン」が古語であるとして考えたなら、「ウンドン」は、饅頭(うどん)の古い形態である「団子状のものを食べ、呑む」を指した呼名であったと推定できそうである。それに対し「ウドン」は、「簾(すだれ)状の物を器=井に入れたもの」を指した呼名と考えられる。

◆ゆきのした

- 1) 「日本国語大辞典」には「ゆきのした」の当て字に「雪下」と表記し、漢語表記に「虎耳草」としている。その語源説として「よく雪のしたに在るところから雪之下の義」と、『名言通・日本語学=林甕臣』の説を採用している。



- 2) ところで、雪の下に在る草は「雪の下」(ユキノシタ科の半常緑多年草)だけではない。

「落」(ふき)もあり、「ゆきわりそう」(雪割草)など調べれば枚挙にいとまない。この「雪の下」と言う植物に対し「雪下」と表記し

ているから「よく雪のしたに在るところから～」とその草の語源発想と推定する。私は本論の2、2)分析表のB専門分野の追究点のところ、専門家の意見を拝聴する意見に触れておいた。国語、言語学者は、とかく資料検討に専念しがちな傾向にあるが、「雪の下」という植物表記は、実は「雪の舌」ではなかろうか。

- 3) この草の特徴点には幾つもあるが、植物学の権威者 牧野富太郎博士は『原色牧野植物圖鑑』の中で「～花弁は5枚で下の2枚が大きく目立つ」と記している。「大言海」の著者 大槻文彦博士は「～夏、一尺許リノ茎ニ白瓣、長ク垂リ、三紅瓣、短ク上ニ竝ブ。」、加えて『世界大百科事典』には「～、花茎の上部の円錐形の花序にまばらに五弁花が横向きに咲き、上方の3片は小さな卵形で、濃い斑点があり、下方の白色の2片は披針形で下垂する。」と記されてある。漢名では「虎耳草」と表記、まさに、葉や茎などに根毛があるのと、2枚の花弁を、虎の耳になぞらえた点など、ユニークな発想である。

- 4) 方言の世界ではどうであろう。青森方言に、ベコノシタ、山口方言にはトリノシタという呼名がある。この=シタは「下」ではなく「舌」を指した呼名と判別できる。花弁が長く垂れ下がっているので「牛の舌」「鳥の舌」と呼んだのであろう。また、

新潟県地方ではイシナメズリと言った方言がある。まさに、生育地と花卉の形態特徴を如実に表現した方言である。

5) ところで、仮に = シタを「舌」として、この「雪の下」には、2枚の長大な花卉が垂れ下がっている。『二枚舌』（「二枚舌を使う」などと言う）ということになる。この用語は「言った事の前後の矛盾したことを言うこと。嘘を言うこと」の意味で、誰もが好んで使いたい用語ではない。そういうこなどから = シタを「舌」と表現しないで「下」と表記したのかもしれない。しかし、どうみても私は「舌」が妥当だと思う。

4. むすび

- 1) この機会に、つくし（土筆）、うどん（饅頭）、ゆきのした（雪の下）の三語を選んだ理由は、実は、一音の要素研究を進めている段階の途上で機会を得たからである。「つくし」と言う用語の発祥が「ツクヅクシ」であるかどうか、実は疑問である。古語は、清音で、二音節、三音節までだと思っていた思いを打ち砕かれた。「うどん」が「ウンドン」だと言うのも解せない。また、「ゆきのした」という植物に対する語源が、少なからず、広範囲の資料検討の後に、明治時代の語源のままである点も不思議である。
- 2) 辞書の体質は、さまざまであろうが、「国語大辞典」と称する辞典は、国語の中心でありたい。そのためには、意味の変革、変化は社会体勢とタイアップして起こり得る事でも、「一語の語源」は、移動、移行、変化、変容してはならないと思う。ただ、こういう大切な研究は、少なくとも国家が、行政の一環として、人、時代を越えて研究していく大切な研究であると思う。なぜなら、日本という国家の母国語は、「日本語」であり、それを研究している者は、国語学者であり、国家の主流語でありつづける重要な国語であるからだ。
- 3) 私は、基礎語と称されている語でさえ、実に『あいまいな意味解釈』である点に日本語を研究している者として淋しさを抱いている。

◆ 参 考 文 献 ◆

「大言海」	大槻文彦著	富山房
「日本国語大辞典」		小学館
「岩波古語辞典」	大野 晋他2名	岩波書店
「原色牧野植物大圖鑑」	牧野富太郎著	北隆館
「世界大百科事典」		平凡社
「語源のたのしみ」	岩淵悦太郎著	毎日新聞社
「漢字語源辞典」	藤堂明保著	學燈社
「全国方言辞典・分類方言辞典」	東條 操編	東京堂出版